

# トライアングルプロジェクト家庭・教育・福祉の連携

～みんなが明るく笑顔いっぱい～

小野市立小野特別支援学校

## 1. はじめに

これまで小野市では、早期からの教育相談支援体制構築事業において、幼稚園・保育所から小学校、また、小学校から中学校へのスムーズな移行支援への取り組みや、発達障害の可能性のある早期支援体制構築事業において中高連携会議を中心とした中学校から高等学校へのスムーズな進学など縦の連携を進めてきた。

これらの取り組みを進めていく中で、国の委託事業である「学校と福祉機関の連携支援事業」のモデル校を受けるきっかけとなったのは、平成30年の西日本豪雨による学校臨時休校時の混乱であった。本来、緊急時の引き渡しは保護者が原則であったが、放課後等デイサービス事業所に迎えを依頼した保護者もあり、対応が分かれてしまった。その時は、子どもの安全第一に協議し、事業所に引き渡しをしたが、緊急対応の確認等、事業所とのスムーズな連携をすることが大切と考え、小野市で子どもを中心に据えて福祉機関とも連携し、横の連携を構築していこうと考え、モデル校を受けることにした。

## 2. 取組の目的

小野市において学校と放課後等デイサービス事業所等との連携を促進し、特別支援学校、特別支援学級在籍の児童生徒のより一層の支援の充実を図るため、国の「学校と福祉機関の連携支援事業」を受託し、小野特別支援学校をモデル校として、学校と放課後等デイサービス事業所等とのスムーズな引継ぎ方法や連携体制を確立するための調査研究を行うことにした。

委託期間は、令和元年7月1日から令和3年3月31日までの、およそ2年間である。

## 3. 現在の放課後等デイサービス事業所の利用状況

市内利用者は103名で（特別支援学級、特別支援学校在籍児童生徒）本校では、34名中30名が利用。10事業所（りあんず・ひまわりクラブ・こどもプラス小野・フォーリーフ・フォーリーフノース・フォーリーフイースト・兵庫あおの病院・るふれ・つばめ会・ホットホーム穩樹等）を利用している。その他、日中一時支援の施設等も利用し非常に需要が高いことが伺える。

## 4. 学校と福祉の連携にあたり確認した一般的な課題

- 理解：放課後等デイサービスについて教職員の理解不足。学校から放課後等デイサービスへ、子どもの状態などの情報提供をはじめとする学校の協力が得られにくい。
- 連絡体制：学校と放課後等デイサービス事業所において、お互いの活動内容や課題などが共有されていない。災害時等の連絡体制が共有できていない。
- 情報共有：それぞれの担当者の連絡先などが共有されていない。お互いに円滑なコミュニケーションが図れていない。

これら大きく3点の課題をクリアし、本校児童生徒やその家庭にとって有意義な連携になるよう取り組みを進めてきた。

## 5、令和元年度の取り組み

### (1) 放課後等デイサービス事業所との確認事項

年度当初に以下の3点を保護者と事業所に通知し確認を行った。

- ① 事業所への引き渡し：児童生徒の送迎は、スクールバスにより黒川町公民館にて行い、学校内や近隣の敷地では行わない。
- ② 行事予定・下校時刻の確認：事業所へ月間予定表を前月中に送付し、下校時刻を知らせる。個人的な下校時刻の変更は、保護者が責任を持って行う。
- ③ 臨時休校時の連絡：学校ホームページに掲載し連絡する。また、一斉メール配信システムにより送信する。(年度当初登録依頼)

### (2) 企画検討会議（各学期に1回、計3回）

関西国際大学の中尾繁樹教授を委員長とし、指導助言を受けながら、今後の取り組みを進めていくための会議。主な出席者は、放課後等デイサービス事業所の代表者、障害者相談支援専門員、小野市発達支援室コーディネーター、市内特別支援教育担当校長、教育委員会、小野特別支援学校校長で、内容は、連携の方向性の確認、進捗状況の確認、視察の報告、名簿や同意書の様式、マニュアル等の作成、アンケート結果の分析等の話し合いを行った。

### (3) 放課後等デイサービス事業所との連携連絡会議

第1回 7月17日 於：小野特別支援学校 担当者の顔合わせ、方向性の確認等。

第2回 8月26日 於：小野市福祉総合支援センター

各事業所と本校担当がグループに分かれて自己紹介、情報共有。

第3回 1月20日～2月3日までの個別連絡会議 於：小野特別支援学校

各事業所の代表者が個別に本校に来校し、関わりのある担任と前回からのつながりのある情報共有。新たな成果や課題等、1年間のまとめと次年度への引継ぎ内容について話し合った。

### (4) 研修会の開催（計2回）

○7月19日 校内研修 於：小野特別支援学校

「家庭・教育・福祉の連携 ～地域でつなぐ子育て～」

講師 NPO法人 こども発達サポートセンター理事長 泉和男先生

- ・連携の意義が理解できた。「生活をデザインする」「地域の子どもたちとの関係を広げる」ことを連携の中で共有していくことが確認できた。

○8月26日 学校と福祉連携支援合同研修会 於：小野市福祉総合支援センター

「子どもが輝いて生きるための学校と福祉の連携～自立活動の観点と人材育成～」

講師 関西国際大学 教授 中尾繁樹先生

参加者：事業所代表者6名、小中学校コーディネーター・本校職員55名

- ・子どもの実態把握を行う時に見えていることだけにとらわれず見えていない要因や背景を探りアプローチしていくことや、学校、福祉、家庭が連携を行う大切さを共有することができた。

(5) アフター巡回訪問 学校から各事業所へ (計3回)

ねらい：長期休業中に放課後等デイサービスを訪問し、児童生徒の様子について観察、情報交換をすることにより理解を深める。

実施時期は、夏季(4日)・冬季・春季休業中に行い、1日3コース7事業所を訪問。

Aコース：りあんず→ひまわりクラブ→フォーリーフ

Bコース：フォーリーフイースト→こどもプラス

Cコース：フォーリーフノース→つばめ会

- ・日頃、学校では見られない姿や、休業中の様子を知ることができた。
- ・事業所の方と更に情報共有できたり、取り組みについて理解を深めたりすることができた。

(6) オープンスクールへの参加 各事業所から学校へ

ねらい：学校行事、オープンスクールでの事業所利用の児童生徒の様子について参観し、理解を深める。

学校行事：運動会5月 ふれあいフェスティバル10月

オープンスクール：6月29日、11月13日・14日、1月16日

- ・学校で頑張っている様子を見て、取り組みについて理解を深めてもらった。

○オープンスクールの参加から実践へとつながった事例①

オープンスクールで、中学部生徒が体力づくり等の片付けの役割を果たしている姿など放課後等デイサービス事業所では見られない意外な姿を、事業所の方に見てもらった。そこで、事業所でも出来ることはないかと考え、お手伝いという役割を設けてもらい、それぞれの場所で児童生徒ができることを伸ばしていけるように継続して支援していくことを確認し、担任やコーディネーター、事業所の職員とのつながりを実感することができた。

○オープンスクールへの参加から実践へとつながった事例②

アフター巡回訪問で、利用者と指導者の距離感が近いことを課題に感じた。学校では、距離感において、年齢相応の関わり方をして欲しいと考え、オープンスクールでの性教育の授業を公開し、放課後等デイサービス事業所の職員に参観を依頼した。さらに、連携連絡会議でも、距離感についての理解が深まるよう性教育の実践の意図を説明、話し合いを行い、年齢相応の関わりをしていくことに合意した。互いに理解を深めさらに繋がりを感じることができた。また、懇談の場で保護者にも報告し安心へとつなげていくことができた。事業所とは、今後も継続して観察していくことを確認した。

(7) おの特教育相談

令和元年7月から、毎月1回実施。対象は小野特別支援学校保護者で、相談者は、小野市発達支援室、発達支援コーディネーターが行う。相談内容は、学校・家庭・放課後等デイサービスでの子どもの様子、将来の進路等についてなど幅広く取り扱う。相談内容に応じて学校や事業所、福祉等と連携しケース会議につなげていく。

○おの特教育相談から3者連携のケース会議につながった事例

夏休み中の、おの特教育相談会で、発達支援コーディネーターが、保護者のニーズ、本人の状況確認し、保護者の了承を得て学校のコーディネーター、担任へとつないだ。そこで、学校・家庭・福祉の3者のケース会議を2学期始業前の夏休みに開催し、保護者、放課後等デイサービス事業所の担当者、本校職員（担任、学部長、コーディネーター）で今後の支援について話し合った。

まず、それぞれの場所での様子や現状について出し合い、ストレスの要因となるものについて整理をしていった。その要因をどこで解消していくか、それぞれの立場でできることを考え、役割を分担していった。

学校では、本人の頑張る場所としながら、活動と休憩をセットにして学習活動をパターン化することや、急な予定変更を極力しないよう見通しをもって活動できるようにして安定を図る役割を担う。事業所では、学校の覚醒した状態から徐々に家庭へのリラックスモードに移行できるよう支援を行う。家庭では、リラックス、情緒の安定を第一に努め、家庭への様子を学校に連絡帳等で伝えるというように役割を分担した。

以上のように3者が役割を分担し、つながりのある支援を行うことで、生徒が安定して生活しながら成長していけるようにしていくことを確認した。

実際、2学期からはつながりのある連携した支援のおかげで、生徒は安定して学習活動に取り組むことができた。

今回のケース会議では、それぞれの場所だから出来ることを考え、自分達の場所だけで何とか支援を完結させないといけないというしんどさや難しさを解消でき、「家庭⇒学校⇒事業所⇒家庭」と1日を通して子どもを支援していくことの大切さや必要性を改めて感じた。

(8) 「トライアングルプロジェクトフォーラム in おの」の開催

トライアングルプロジェクトフォーラム in おの～みんなが明るく笑顔いっぱい～  
令和元年12月6日（金）3部制

第1部 小野特別支援学校自主研修発表会 公開授業 於：小野特別支援学校

研究テーマ「一人ひとりの力を高める自立活動の指導～実態把握を起点とした指導の充実～」

約80名参加（学校関係者、放課後等デイサービス事業所関係者等）

第2部 トライアングルプロジェクトフォーラム in おの 於：小野市うるおい交流館エクラ

○学校分科会：本校の自立活動の取り組み

「一人ひとりの力を高める自立活動の指導～実態把握を起点とした指導の充実～」

約30名参加（小・中・特別支援学校関係者等）

指導助言：関西国際大学 中尾繁樹 教授

○保護者分科会：三市（三木・小野・加西）特別支援学校PTA研修会

「自立と社会参加を見据えた系統的な支援～発達障害のある人の就労の現状と課題～」

約30名参加（三市の保護者等）

講師：ひょうご発達障害者支援センター センター長 和田康宏 先生

○福祉分科会：学校と福祉機関との連携～小野市の取り組み～

約40名参加（学校関係者、三市の放課後等デイサービス事業所職員等）

指導助言：関西国際大学 中尾繁樹 教授

### 第3部 全体会 於：小野市うるおい交流館エクラ

○講演「家庭・教育・福祉の連携 ～みんなが明るく笑顔いっぱい～」

講師：関西国際大学 中尾繁樹 教授

○ヨガトレ体験

講師：Yoga i. um 代表 植田真由 先生

約120名参加（学校関係者、三市の放課後等デイサービス事業所職員、保護者等）

- ・学校、家庭、福祉に関わる方々が一堂に会し、子ども達の今と将来についての取り組みの報告や協議、講演を聞くことによって、互いの理解を深めることができた。子どもを中心に据えたつながりのある、連携した支援を行っていくことの重要性を感じることができた。

#### (9) 令和元年度の成果と課題

先に連携における一般的な課題として挙げた理解・連絡体制・情報共有の3つの視点より初年度の成果と課題をまとめると以下ようになった。

○理解：＜成果＞

- ・放課後等デイサービス事業所についての教職員の理解が進んだ。
- ・職員と教員の「顔の見える関係」ができつつある。

＜課題＞

- ・連携のための個別の支援計画等の作成

○連絡体制：＜成果＞

- ・連携に係る年間スケジュールの共有ができた。
- ・一斉メール配信による緊急時連絡体制が確認できた。

＜課題＞

- ・事業所と学校の連携のための時間確保。災害時対応マニュアルの作成。

○情報共有：＜成果＞

- ・特別支援教育コーディネーターが窓口になる事を確認できた。
- ・ケース会議や連絡会での情報共有の場ができた。

＜課題＞

- ・保護者同意の確認方法や手続きの確立。

#### 6. 臨時休校中の放課後等デイサービス事業所の利用と連携の取り組み

臨時休校期間 3月12日（木）～3月24日（火）、4月9日（木）～5月31日（日）

分散登校日【5/19、20、21、26、27、28】

##### (1) 事業所への受け入れ体制の確認

臨時休校決定後、放課後等デイサービス事業所へ児童生徒の受け入れについてFAXで照会した。3月11日（水）、4月8日（水）

また、居場所の確保として「一斉休業に係る放課後等デイサービス事業所の利用について」障がいのある児童生徒の学校臨時休業に伴う居場所確保の手順について通知した。

(2) 臨時休校中の放課後等デイサービス事業所の利用状況について

臨時休校中、放課後等デイサービス事業所へ本校児童生徒の利用についての照会をFAXで行い、児童生徒の居場所について毎日確認した。

	3月休校中	4月休校中	5月休校中
在宅（家庭、親戚等）	58%	40%	51%
放課後デイ等事業所	36%	52%	42%
学校受け入れ	6%	8%	7%

(3) 臨時休校中の放課後等デイサービス事業所との連携

○アフター巡回訪問 AコースからCコースに分かれて巡回。

実施日数は、3月に2日間、4月に3日間、5月に2日間訪問し、児童生徒の様子について情報交換を行った。

○学校施設（運動場等）の開放

文部科学省からの「教室、図書館、体育館、校庭等が利用可能である場合には積極的に学校施設の活用を推進して頂きたい。」という趣旨の通達と、市の公園の利用人数の制限や他の家庭、集団の利用があれば利用できないなど放課後等デイサービス事業所の窮状を知り学校開放を行った。要望のあった5事業所が運動場や体育館の利用を行った。3月に1回、4月5回、5月に12回、合計14日で18回の利用があった。アフター巡回に加え、本時児童生徒の元気な姿を知ることができた。

○事業所への運動DVDの配布

全教員参加のキラキラサンサン体操を始め、過去に行事で踊ったことのあるダンスや、食前体操など学校の学習活動で行ってきた内容をDVDにまとめ7事業所に配布を行った。他校の児童生徒や卒業生と一緒にDVDを活用してもらった。

## 7. 令和2年度の取り組み

初年度の成果と課題に基づいて今年度の取り組みを進めている。

(1) 放課後等デイサービス事業所との確認事項

○放課後等デイサービス事業所利用者名簿の相互確認

年度初め（今年度は7月）に、放課後等デイサービス事業所には利用者名簿（様式1）を学校に提出を依頼し、保護者には利用届（様式1-2）を学校に提出してもらった。それを合わせて、利用一覧表を学校で作成し、下校時のバス乗車前に行き先確認を行い確実な引き渡しができるようにした。また、今回のような長期休校や緊急時、長期休業中等の居場所確認にも活用する。

○事業所への引き渡し・行事予定や下校時刻の確認・臨時休校時の連絡の3点を（様式2）にまとめ事業所と保護者に通知し確認を行った。

○連絡帳の相互閲覧についての確認

連携連絡会議により、情報共有の手段のための連絡帳の活用を行うこととし、7月より放課後等デイサービス事業所と保護者に同意書の提出を依頼し、保護者の同意書は双方で保管することにした。双方の同意がとれた家庭から実施していく。

## ○個別のファイル作成

各事業所のファイルを作成し、職員室に保管することにより、既定の様式や情報交換の記録等を必要に応じて閲覧できるようになった。ファイルの内容は以下になっている。

- ・事業所所在地、地図、連絡先（TEL、FAX、メール、HP）
- ・利用者名簿（様式1、様式1-2）
- ・送迎場所等確認事項（様式2）
- ・連絡帳相互閲覧同意書（様式3）
- ・連絡会議記録、ケース会議記録、オープンスクール等参加記録、巡回訪問記録
- ・災害時の対応マニュアル

## （2）企画検討会議

企画検討会議 第1回 8月24日 於：小野市うるおい交流館エクラ  
新型コロナウイルス感染症予防の為、開催が遅くなったが、昨年度の取り組みと今年度の方向性について協議した。

## （3）放課後等デイサービス事業所との連携連絡会議

第1回 7月27日、28日、29日 個別連絡会議 於小野特別支援学校

7事業所の担当者1名ずつが来校し、個別に行った。事業所の代表者と新しい担任との顔合わせや休校中の児童生徒の情報共有・相談事項についての確認、利用者名簿作成の依頼や送迎時・引き渡し方法等の確認を行った。利用日の学校での様子を知りたいという事業所からの要望で連絡帳の相互閲覧等の情報伝達手段が話題となった。連絡帳の相互閲覧においては、要望のあった1事業所4名からスタートし、その経過を見て次回の連携連絡会議で各事業所に提案することにした。また、児童の学校での様子を知りたいという要望もあり、日程調節を行い、個別参観日の設定を行った。事業所とは違う一面もみられ新たな関わりを持つきっかけとなった。

第2回 8月24日 於：小野市うるおい交流館エクラ

1回目の連携連絡会議での情報交換からの変化についての共有やすべての事業所への連絡帳相互閲覧の提案、睡眠リズムが乱れている児童の睡眠記録を連携してとっていくことなど、1回目の情報交換を受けてより具体的な話し合いを行うことができた。

第3回2月16～18日 オンラインによる連携連絡会議

新型コロナウイルス感染防止に係る緊急事態宣言中に、放課後等デイサービス事業所とオンラインで情報交換を行った。5事業所5名と本校特別支援教育コーディネーターでオンラインが可能な各事業所との個別連絡会を実施した。内容は、事業所担当者と特別支援教育コーディネーターによる面談、連絡帳の相互閲覧についての効果等の確認を行った。児童生徒の気になる状況についての情報交換。（行動面・健康面・学習面）短時間で効率的な情報交換ができた。

第4回3月12日・15日（予定） 小野特別支援学校で個別連絡会議を実施。

各事業所担当者と児童生徒の合理的配慮シートを活用して情報の共有を行う。

- ・個別懇談で保護者に確認済みの合理的配慮について、放デイ職員と共通理解する。

- ・具体的な配慮事項を共有することで、児童生徒理解につながる。
- ・学校、家庭、放デイの三者の共通理解が進む。

#### (4) 障害者相談支援専門員との連携

昨年度末に、事業所から本校生徒の支援について学校に相談があった。学校での支援でも少しずつ良好な状態になっていたが、事業所の代表と担任、本校コーディネーターでケース会議を行いそれぞれでできることを確認したが、支援の難しさを共有した。

今年度に入り、本人も含めて学校・事業所での困り感は変わらずにあったので、相談支援専門員を通して、ひょうご発達障害支援センターの相談員に定期的にコンサルテーションをすることになった。これまでの支援方法について根拠をもって評価を行い、安心してその支援を継続することができた。また、分析方法を学び、記録をとることでより効果的な支援方法を話し合うことができた。その結果、本人が落ち着いて生活できる時間が長くなり、出来ることも多くなってきた。その内容を保護者や事業所と共有しそれぞれ安心して支援にあたるようになってきた。今では、将来も見据え、相談支援専門員を通じてショーステイ先等の検討も行っている。

#### (5) 研修会の開催

○8月24日(月) 学校と福祉連携支援合同研修会 於：小野市うるおい交流館エクラ  
講演「家庭・教育・福祉の連携 ～みんなが明るく笑顔いっぱい～」

講師 関西国際大学 中尾繁樹 教授

・コロナウイルスの流行により、子ども達を取り巻く環境が急変したことで、これまでの課題が変わってくる。リスクマネジメントの意義を理解し、自己肯定感を高め、問題行動を生まないための取り組みが必要であることが分かった。より児童生徒や家庭の実態把握が必要となり、家庭・教育・福祉の連携をモデル校の取り組みとしてではなく、市内の小中学校も当事者意識をもって進めていく必要があるということを通理解することができた。

#### (6) トライアングルプロジェクトフォーラムⅡ in おの ～みんな明るく笑顔いっぱい～

3月9日(火) 学校と福祉連携支援合同研修会 於：小野市うるおい交流館エクラ

参加者：北播磨管内の放課後等デイサービス事業所職員、北播磨管内市町の教育委員会担当者、小野市内小・中学校特別支援教育コーディネーター、小野特別支援学校教職員、特別支援学校コーディネーター、関係機関の職員等

実践発表①「学校と福祉機関の連携 ～特別支援を核にした実践～

小野特別支援学校 山中宏之

実践発表②「学校と福祉機関の連携 ～自己肯定感・自尊感情を育てる実践～

小野特別支援学校 真嶋睦子

実践発表③「学校と福祉機関の連携 ～放課後等デイサービス事業所の実践～

こどもプラス小野 児童発達支援管理責任者 吉田和弘

協議 5グループによるグループセッション

講演家庭・教育・福祉の連携 ～みんなが明るく笑顔いっぱい～」

講師 関西国際大学 中尾繁樹 教授



#### (7) オープンスクール

- ・希望のあった事業所と日程を調整し、個別に参観を行った。学校での頑張りを認めてもらい、児童が大変喜んでいて。
- ・授業の youtube 配信では、日頃の子供達達の授業の様子を見て頂くことができた。オープンスクールでは、手を振ったり、興奮したりする場面があったので、普段の様子を見ることができて良かった。また、日頃参観に行けない職員も見に行くことができたのも良かった。
- ・行事の参観では、オペレッタが今年度は保護者のみの鑑賞だったため、当日のDVDを事業所に配布した。家庭や学校以外でも見て頂き褒められてうれしい様子だった。

#### (8) 個別の支援計画検討会議

事業所での個別の利用計画作成のためのモニタリングや面談等に本校職員が参加し、担任、保護者、事業所の3者と一緒に実態把握や手立てを考える機会をもった。その際に、一日を通じた支援の連携やエピソード記述を通じた子どもの理解も行い充実した話し合いができた。

#### (9) おの特教育相談

令和2年度も、学校再開後に行った。相談内容は、休校中の様子や学校・家庭・放課後等デイサービスでの子どもの様子、将来の進路等についてなど幅広く取り扱う。相談内容に応じて学校や事業所、福祉等と連携しケース会議につなげていった。

### 9. まとめ

以上のように定期的な企画検討会議の開催、情報共有のための様式の整備、定期的な連携連絡会議の開催、ケース会議の開催や専門家へのつなぎ、そして、市内小中学校への啓発としてのフォーラム開催や研修会の開催等を実践の基盤として取り組んできた。また、コロナ禍においても工夫して取り組みを進める中で、新たな連携方法も見出すこともできた。

福祉機関、主に放課後等デイサービス事業所を主とした福祉機関とつながることで、子どもを中心に据えて家庭・学校・福祉でのつながりのある支援ができるようになってきた。そして、それぞれが行ってきた点での支援が線となり一日を通して子どもを支援していくというイメージを持つことができた。自分たちだけで中心にいる子どもの支援を何とかしないといけないと気負いすぎることなく、家庭・学校・福祉がそれぞれの利点を生かして役割分担して連携し、一貫した支援体制を構築することで、一日を通して子どもが笑顔いっぱいになる支援ができるようこれからも連携を継続し、定着させていきたい。